

「モービー・ディック」(ハーマン・メルヴィル) 其の二

或時、一等航海士スターバックが、「畜生相手に仇討ち」をするとは「狂氣の沙汰」だと云つてエイハブを窘めようとする、エイハブが云ふ、「眼に見えるものは、全てこれ、ボール紙の假面に過ぎぬ。(中略) 人間、何かをぶち壊すとあればその假面をこそぶち壊せ! 囚人が壁を破らずしてどうして外に出られるか? わしにとつて、あの白鯨は眼前に聳えるその壁だ。(中略) あいつの中では、測り難い悪意に操られた凶暴な力が動いてをる。その測り難いもの、これがわしは憎い。(中略) この憎しみをあいつによつて霽らしてやる。(中略) 侮辱されたら太陽にだつて打つてかかるこのわしだ。(中略) 眞理は何者にも囚はれぬ」。

開闢以來、人間を翻弄して已まぬ「測り難い悪意に操られた凶暴な力」の正體を何としても見極めたい、それがエイハブの「仇討ち」の眞の意味だ。それが果せぬ限りは「ボール紙の假面」の欺瞞に甘んじ、「眼前に聳える壁」を破らうともせぬ卑屈な「囚人」の儘であるに等しい。

誇り高きエイハブにそれはどうしても耐へられぬ。それ故彼は叫ぶのだ、「侮辱されたら太陽にだつて打つてかかるこのわしだ」、「眞理は何者にも囚はれぬ」。

「眞理は何者にも囚はれぬ」、これこそはこの作品全篇を貫くモットーである。エイハブだけがさういふ事を云ふのではない。語り手イシュメイルが自然界最大の生物たる鯨の身體や生體について微に入り細を穿つて穿鑿するものも、「鯨といふものを知らなければ、『眞理』の國の感傷的な田舎者に過ぎぬ」と信ずるからだし、何よりも第二十三章「風下の岸」にはメルヴィルの認識のヒロイズムを如實に證す一節がある。「すべて深い眞摯な思考とは、魂が、おのれを偽瞞と卑屈の岸に吹き上げようとする天地間の凶暴な風に抗して、あくまでも自由と獨立の海原を守らうとする、その豪膽不屈な努力に他ならぬ。／だが、陸を離れたところのみ（中略）至高の眞理があるのだとすれば——風下の岸にたとへ平安があらうとも、汚辱のうちにそこに打ちつけられるよりは、荒れ狂ふ茫漠の海に滅ぶ方がましではないか！まるで蛆蟲さながらに、おう！誰が陸になど匍ひすがらうぞ！」

かうしてメルヴィルは「究極的眞理のための危険で破滅的な迄の探求」（R・P・ウォーレン）の道突き進む。無論、人間性に關する眞理についても同様である。或晩、二等航海士スタッ

ブが捕獲した鯨の肉を切りステーキにして頬張つてゐると、血の臭ひを嗅ぎつけ多數の鯨が群がつて来て、我勝ちに争つて鯨に食ひ付き、騒々しくも凄じい光景を展開する。スタッフは黒人の老コックのフリースに鯨に説教して静かにさせろと命じると、フリースが鯨に向つて云ふ、「おめへたちの貪欲はな、皆の衆、こいつを悪とはおれは言はん。生まれつきだからな。(中略)が、その性惡な生まれつきに手綱をかけるといふこと、これが肝心よ。おめへたちは間違ひなく鯨だけでも、おめへたちの中に住んでるその鯨の根性に手綱をかけたら、(中略)おめへたちも天使になるんだぞ。嘘ぢやねえやな。天使といふものは、おめへ、鯨の根性にちやんと手綱をかけた奴のこつちやねえか」。いいぞ、「それでこそキリスト教だ」とスタッフが半疊を入れ、「もつとやれ」とけしかけるが、固より鯨は聴く耳を持たない。寓意の存する處は明らかである。二千年前、イエスが人間に鄰人愛を説いたのは、鯨に天使たれと説くにも等しい所業ではなかつたのか、メルヴィルはそれが云ひたい。かういふ類の徹底した性惡説を一度も考へた事のない手合を、『眞理』の國の感傷的な田舎者」と云ふのである。

(野崎孝譯、世界の文學セレクション三六、中央公論社)